
蝶、コピー機、そして僕

高田那美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蝶、コピー機、そして僕

【Zコード】

Z5900A

【作者名】

高田那美

【あらすじ】

蝶は僕の元から去つた。喪失感だけを残して。コピー機の男は言う。それは君の前に現れると。

『蝶一機の男（一）（前書き）

「」の小説は

『butterfly』<http://nw.ume-labo.com/dynamic/novel/a/n5617a/>

をベースとして、加筆・修正・再構築を行ったものです。

『butterfly』の内容を知らないなくても楽しめるようになりますが、よろしければそちらもどうぞ。

「コピー機の男（一）

「コピー機の男（一）

「つまり君は、現実と妄想の区別がついていないんだ」

彼はこちらを振り向きもせずに言った。その声はまるで教壇に立った教師が試験の開始を告げるような、つまらなそうな声だった。しかし僕は、憤慨も後悔もせずに彼の後ろ姿を眺めていただけだった。

彼はさつきからコピー機を実際に優雅な手付きで操作していた。スキャン部分の蓋を上げ、テーブルクロスを引くかのように原稿をセットする。指示された場所に一部の狂いもなく収められたのを確認して、恭しく蓋を閉める。紙のサイズと白黒かカラーか、色はどれほど濃くすればいいのか（薄いものは濃く、濃いものは薄く）、何部刷ればいいのかを、彼はタッチパネルを通してコピー機に伝える。彼にかかりれば、コピー機のタッチパネルもピアノの鍵盤となる。今にもショパンのピアノ・ソナタが聞こえてきそうだ。

やがて全ての設定を終えた彼は、静かに印刷ボタンを押す。コピー機は厳かな音を立てながら紙を吸い込み、吐き出していく。彼とコピー機の間には、完ぺきな信頼関係が成立していた。まるで円熟した夫婦のように。

僕と彼は、同じ大学の同じ学部の同じゼミ生だったが、僕と彼は、大学内での知名度において天と地ほどの差があった。僕は彼を三浦と本名で呼んだが、どうやらそうするのはごく限られた人間だけであり、大抵の場合彼はあだ名や通称で呼ばれた。彼以上に多くのあだ名を持っている人間を僕は知らない。ある上級生は彼のことを『コピー機の恋人』と呼び、ある同級生は『複写人間』と呼び、ある教授は『ジョセフ・ウィルソンに憑かれた男』と呼んだ。何も知ら

ない新入生だけが、『変人』と実に正しい評価を下した。

彼はいつでも、図書館のロビーに設置されたコピー機の前にいた。図書館以外で彼の姿を見かけることはない。講義に出ている様子もないし、道ですれ違うこともない。食堂ですら、だ。昼食時になると、辺りを歩いている下級生を食堂へと走らせ、ホットコーヒーとサンドイッチのセットを手に入れる。サンドイッチをかじりながら紙の補給をし、コーヒーをすすりながらタッチパネルの点検をし、空になつた紙コップをごみ箱へ投げ入れると共に午後のコピーを開始する。

一日中コピー機を独占しても、誰も何も言わなかつた。僕らは（つまり彼以外のこの大学の人間は）、コピーを取る必要があつたら、彼に必要なだけのコピー代金と原稿を手渡せば良かつた。そうすればしかる後に、全く完璧なコピーが手に入るからだ。我々の間では、彼の許可なくコピー機に触ることは一種のタブーだつた。事実コピー機は無知な者が扱うにはあまりにも不愛想だつた。紙は詰まるしインクは漏れる。

どんな技術も極めれば神性が宿る。彼の場合はそれがコピーだつただけだ。

「君は蝶と名乗る女と知り合ひ、冬の間一緒に暮らした。女は春になると突然消えていなくなり、後には女の『写つていらない』写真だけが残された。そうだね？」

「その通りだ」

僕はついさつき借りてきたばかりの本を意味もなく捲りながら、三浦の言葉にごく簡単な返事をした。熱心な会話をするには、午前十一時の図書館のロビーはのどかすぎた。

「そして君は混乱して学校を一週間休んだ。授業の遅れを取り戻す気にもなれず、朝から僕のところに入り浸つていてる」「迷惑ならそうと言つてくれれば良い。行くべき場所は別にあるみたいだから

「君がいなくなつたら、一体誰がこの紙の束を正しく分けてホツチキスで綴じてくれるんだ?」

三浦はそういうと、コピー機の蓋の上に置かれていたホツチキスを投げてよこした。僕は危なつかしくそれをキヤツチし、針が入つているかどうかを確認した。

「神様はなんで君に、ホツチキスをうまく扱える能力を与えなかつたんだろうね」

「必要ないとthoughtたんだろう? ジュガイルから」

我々が言葉を交わしている間も、コピー機は休みなく紙を吸い込んで吐き出していた。三浦は満足気にその様子を眺めてから、こちらに振り返った。

理知的な顔と聞いて、人が想像する顔の平均値を取つたならば、それはきっと彼の自画像になるだろう。三浦はそんな顔をしている。細い銀のフレームの眼鏡の奥で、やや細めな目が僅かばかりの疲れを抱きながら瞬いていた。小ぶりな鼻と薄い唇とが若干不愛想な雰囲気を醸し出しているが、あとはこれといって嫌われるような要素はない。頭だつて人並み以上に優れているし、冗談だつて上手い。しかし彼と親しく接している人間は僕以外にはいない。皆遠くから眺めているだけだ。

それは偏に彼の性格とのもの言い方に由来するのだろう。彼は気まま過ぎるほど気ままに振る舞うし、言われたくはない本当の事を言いすぎる。

「気の済むまでここに居ればいい。君は現実から逃げられるし、僕は喋り方を忘れて済む」

「別に逃げている訳じゃないんだけどな。ただ混乱しているだけだよ。裁縫箱の中で糸くずが絡まっているみたいにさ」

「それで僕にその糸を解いてもらおうと? 言つておくが僕は不器用だぞ」

「けれど口は上手い。物事を順序立てて、論理的に考えられるし、適切な表現を知っている。なにより、僕の話を信じるのは君ぐらい

だ

「そして僕には君ぐらいしか話しあ相手がない」

そこで三浦は薄く笑った。多少の皮肉を含んでいるよつとも感じられたが、僕も一緒に笑つた。

「良かつたな。利害が一致した」

三浦はジーンズの後ろポケットから皮の小銭入れを取り出し、たつたいま図書館から出てきた男に声をかけた。男は眼鏡をかけハードカヴァーの『ライ麦畠でつかまえて』を抱えた、この大学で見かける一般的な（田に生氣はなく、やや猫背で、道の端を好んで歩く）タイプの青年だったが、彼に声をかけられると、その陰鬱な瞳に一瞬で光が射し、背筋をしゃんと伸ばして大股でこちらにやってきた。

「コーヒーですか？　三浦先輩」

少しどもりながらも、男はその外見からは想像も出来ないほど活動に溢れた声で尋ねた。僕は男の変貌ぶりに驚いたが、三浦は無感動に要件だけを伝えた。

「一つ買ってきてくれ。ひとつはブラックで、ひとつは砂糖とミルクの両方を増量。大至急頼んだぞ」

男は三浦から小銭を受け取ると、実に綺麗なフォームで走り出した。その姿は使命感という美しさに満ち溢れていた。

「いつも彼に頼むのか？」

「中学時代に陸上部にいたらしいんだ。それに良い奴だからな」

「君は教祖様にでもなれるんじゃないのか？」

「コーヒー機が御本尊の宗教の？」

我々は声を上げて笑つた。

「僕が思うに」

三浦はそこで言葉を切り、砂糖とミルクがたつぷり入ったコーヒーを一口すすつた。

「蝶というのは、認識の誤りなんじゃないかな？」

「認識の、誤り」

僕は三浦の言つた言葉を反復した。それは一般生活にはあまり馴染みのない言葉だった。

「 そう。君がただ勝手に相手を『蝶』だと認識しているだけで、『蝶と名乗る女』は実際には全く別の存在なんじゃないかな」

僕は手元に視線を移した。冷めかけた「コーヒー」の表面が僅かに揺れていった。口元に紙カップを持っていき、ごく少量を口に含んだ。酸味と苦味が口中に広がり、ざわついていた心が少し落ち着いた。三浦はしばし沈黙した。その沈黙はまるで慎重に正しい言葉を選んでいるかのようだった。

「あるいは」

無感傷に彼は言った。

「 実際にそれは蝶なのかもしれない。ただ我々が『蝶』と認識している存在とは全く別の『蝶』という存在」

「どちらにしろ」

僕はため息まじりに言った。

「 彼女が何者かなんて関係ないよ。僕はただ、何故彼女が消えてしまったのかが知りたいだけだ」

「 そしてもう一度彼女に会いたい？」

「 できるならね」

今度は三浦がため息をついた。それは小学生が溜まりに溜まった宿題に手を付ける前につくため息と同質だった。さて、これは骨が折れるぞ。

「 だったら君は、こんなところで僕と一緒にコーヒーを飲んでいる場合じゃない」

「 やるべきことが分からなんだ」

三浦は残っていたコーヒーを飲み干し、空になつた紙カップをごみ箱へ投げ捨てた。紙カップは音もなくごみ箱に吸い込まれた。そして彼は立ち上がり、諭すような穏やかな声で言った。

「 君が気づいていないのか、時がまだ足りないのか いずれにせよ、それは君の前に現れるよ」

そのまま三浦は振り返りもせずにコピー機の方へとまっすぐに歩いていった。僕は日の光を体一杯に浴びながら、彼の言葉を頭の中で何度も繰り返した。

それは君の前に現れるよ。

蝶との日々（一）

部屋に帰ると、蝶はソファーの上で毛布に包まり眠っていた。そのソファーは僕が一人暮らしを始めた頃に家具屋で一時間迷ったあげくに買ったイタリア製の小さなもので、所々赤い革が剥げ始めていることと置の部屋には恐ろしく似合わないことを除けば文句の付けようがない逸品だった。蝶は僕の部屋に来てすぐにそのソファーを自分の巢に決めた。それ以来、一日の大半をふかふかした革張りの上で過ごしている。

僕はなるべく足音を立てずに部屋を横切り、流しへたどりついた。スーパーの袋の中から買ってきた物を取り出し、あれやこれやと整理をしていくうちに蝶が起き出した。

「起こしちゃった？」

尋ねると、蝶は小さく首を振った。

「起こして良かったのよ。私は寝すぎたから」

「けど、今はそれが仕事だらう？」

「今は、ね」

蝶は微笑み、僕も微笑み返した。

蝶はさらさらと伸びた黒髪を手でとかしながら、二日前に僕が貸したジャン＝フィリップ・トゥーサンの『カメラ』を読んでいた。その姿は彫像のように美しく、それゆえに僕は彼女がこの世のものとは思えなかつた。

「ねえ」

彼女は質量を伴わない声で僕を呼んだ。

「あなたは寂しくないの？」

「どうしてそんなことを聞くんだ？」

僕の言葉に、彼女はあっけに取られたような顔をした。

「だって今は冬でしょう？ 冬は寂しい季節だから」

「寂しくはないよ」

「じゃあ春は？」

僕はスモークサーモンとチーズを冷蔵庫にしまいながら答えた。

「君がいなくなる寂しくなるだろうな」

「じゃあ、あなたはきっと寂しくなるわ」

外では木枯らしがしっかりと根を張り、春の訪れはまだまだ先だつた。

やがて来る別れを思うと僕は悲しくなり、声を殺して泣いた。涙は止めどなく溢れた。蝶はソファから下りて僕の傍に来た。そして柔らかな四肢をそっと伸ばして僕の頭を撫でた。

「寂しくなつたら」

蝶はゆっくりと、何か大切な物を確認するかのように言った。

「私をまた求めてくれる？」

僕は何度も頷いた。

「ペーー機の男（2）

「昆虫図鑑なら、右から七番目、前から九番目の棚の二段目にあるよ」

三浦は僕の姿を見るなり言った。僕は何も言わずにロビーのソファに座った。

「やることが分からないんだ」

僕は昨日と同じ台詞を言った。一晩過ぎても、僕の頭に閃きは訪れなかつた。

「きっとまだ時間が足りていらないんだろう？」

三浦は慈愛に満ちた声で慰めてくれたが、僕は溜息でそれに応えた。
「時間は無限にある訳じゃないし、あつたとしても一つの物事に全て注ぎこむなんて不可能だ」

「その通りだ」

憐れむような合いの手を無視し、僕は続けた。

「その少ない時間の内の幾らかを、待つことに費やせつてこうのか？」

×が未知数すぎて、気が狂いそうだ

「昨日はよく眠れた？」

僕は首を振つた。三浦は頷き、「ペーー機から離れて僕の向かいに座つた。

「君は蝶のことを一般的な蝶のことを、どれくらい知っている？」

僕は少し考えてから言った。

「専門的なことは、ほとんどなにも知らない

「ほとんど、なにも」

三浦は吟味するように僕の言葉を繰り返した。

「なあ、君はまず蝶について知るべきじゃないのか？」

僕はソファーから立ち上がり、無数にうごめく書架の群れへと向

かつた。

「昆虫図鑑なら、右から七番田、前から九番田の棚の三段田にある
よ」

三浦は最初に言つた言葉をもう一度繰り返した。

「人生には傷が必要だと思つ」

三浦は咳くように言つた。僕はページを捲る手を止めて三浦を見た。彼はいつも通り、無感情にコピー機の前に存在していた。

「傷？」

僕が聞きかえすと、三浦は小さく頷いた。

「そう、傷。生きていけるかどうかギリギリのレベルの傷が必要なんだと思う。何かのために傷付き、そして自分のために泣くことが」「僕にとっての傷が、蝶の消失だというのか？」

「あるいは、蝶と出会ったこともかもしれない」

三浦はコピー機の電源を落とし、僕の前に立つた。そしてジーンズの後ろポケットから、一枚の紙を取り出した。

「実は昨日休学届を出したんだ。期限は決めずに」

そう言つて三浦は紙を僕に突き付けた。

「そして、これは君の分だ」

僕は紙を受け取らずに、代わりに図鑑の一ページを見せた。そこには十四の『青い羽根』の蝶が掲載されていた。

「僕の話を覚えていいか？ 蝶は青い羽根をしていたんだ」

「……生息地がずいぶんバラけている」

「何のための休学届だ？」

三浦は僕から図鑑を受け取ると、再びコピー機の電源を付け、いつも通りに優雅にコピーを取つた。

A5の紙一杯に印刷された十四の蝶は、図鑑に掲載されていたときよりもずっと生き生きしているように見えた。紙に授けられた転写の才能。

「休んでくる間、コピーは使える？」

「僕が居ないなら居ないならで、皆がそれぞれ自分で取るさ。紙と
インクの使用量は増えるだろ?」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5900a/>

蝶、コピー機、そして僕

2010年10月22日10時14分発行